

が完成しました。題名を『会津農書』とつけました。江戸時代の農業の本といえば、宮崎安貞の書いた『農業全書』がよく知られていますが、実はそれより十三年も前に、それにおとらぬ内容をもつ『会津農書』が、与次右衛門によって書かれていたのです。

『会津農書』は、三巻にわかれてできています。

上巻は、水田のことが書いてあります。まず、土の種類が、いくつかあげられています。その種類のちがいによって、土は重さがちがい、その土からとれる米の味がちがってくるのがのべられています。土のちがいだけでなく、水の重さのちがいによっても、作られる品種がちがってくることで、土と水にあった品種をえらぶことが書かれ、苗代の種まきから、稲のかりとりまでの、稲の作り方が、くわしく説明されています。

中巻は、畑の作物の作り方が書いてあります。畑の土の種類から、いろいろ